

近世京都商家における家訓作成の根本要因

赤 田 光 男

一 家訓作成の必然性

近世京都の都市社会において、町組（町連合）、町、五人組という地縁集団の諸活動があり、一方また本家・分家・別家・奉公人という同族集団の諸活動があり、これらの諸集団はそれぞれの目的を達成するために強固に結束した。すなわち京都は地縁集団と同族集団が併存し、両者が臨機応変に「結び換え」をして機能する、いわば地縁同族併存都市としての性格を有するということ⁽¹⁾は、すでに指摘したとおりである。

本稿では商業活動の円滑な発展と「家」永続のために形成された商家同族団の家訓の意義について考察したい。商家同族団は一般に屋号やノレン印を共通にし、ノレンウチという同族意識の元で経済活動や年中行事、先祖祭り、婚礼、葬儀などを営む。この協業協祭の互助行動を通じて、ノレンウチの商売の繁栄と「家」の永続が推進される。ノレンウチは同族共同体であるから、この共同体の運営のためには所属員が守るべき共通の規範が必要となる。そこに生まれたのが同族家訓であった。同族家訓には所属員の日常生活やハレの行事、商業活動

における守るべき規範が掲げられており、年間数次これを読み聞かせてその徹底をはかった。まさに同族員に共通する精神の涵養とその貫徹を目ざした。また本家主人が「家」の安泰、永続を危うくするような行動をした時には、別家といえども本家主人に対して諫言をすることが肝要で、それは主人に対する仕える者の「忠」でもあると説く事例があり、極めて合理的な「家」運営の実態があったことが知られる。それが同族という「家」永続の秘訣でもあった。柔軟なる対応と団結による精神的・組織的「家」運営によって、厳しい社会を耐えぬこうとする知恵が家訓には吐露される。すなわち同族家訓は同族精神の育成と同族共同体組織の発展のためには必然的に不可欠なものとなった。

都市の商業活動には、農村の農業活動と異なり、たえず不安定要素があった。貸し倒れ、営業不得手、営業拡大による失敗、商品価格の暴落、遊芸放蕩、法違反などで、絶家や衰家となる状況が近世の京都には多かった。これを防ぎ、「家」の永続、繁栄をはかるために家訓を作成する必然性があった。

三井惣領家の三代目、三井高房（一六八四～一七四八）が享保一三年（一七二八）頃に作成し始めた『町人考見録』⁽²⁾には、京都の豪商四

六家の由来、繁栄時の状況、居宅、業種、没落要因、没落状況、没落後の実態が詳しく記されている。この書の作成目的を同書末尾に次のように記している。

此書は中西宗助、よりく予語而云、今先祖親くの功業によつて、同名一致に家業をつとめ、先は時節を得、商に不足なしといへども、町人の盛衰は其主の守りにあり。よつて昔よりの町人の家を失ふ趣を、親に尋てしるし置、家門の輩にも見せ度旨をす、む。故に此事を親に告、時に老父七十年來、見および聞伝ふる処を書記して、予是をあたふ。しばく序跋を加へ、文義をかざらずして、是を留る者也。

番頭の中西宗助のすすめにより、高房は父で二代目高平(宗竺)から「町人の家を失ふ趣」を聞き記して一書としたことがわかる。「町人の盛衰は其主の守りにあり」というように、歴代当主の家運営がその家の盛衰の鍵を握ることになったから、絶家、衰家とならないための規範作成と共に、他方絶家、衰家の実例を知る必要があった。三井家家祖高利は元禄七年(一六九四)頃に「遺訓」を残し、二代目高平は享保七年(一七二二)に『宗竺遺書』を定め、同族の団結、営業の方法、節儉、主人の役割、同族子弟の修業などを規定し、三井同族の協栄を目ざした。三代目高房の『町人考見録』は京都商家の没落状況を確認することによって三井同族の戒めの鑑としたわけである。家永続のための規範としての「遺訓」、『宗竺遺書』、絶家しないための没落家確認書としての『町人考見録』が三代目迄に出揃った。いわば陽陰二種の家訓が作成され、三井同族の繁栄がはかられた。

『町人考見録』の序には家の永続がいかにもつかしいかを次のよう

に記している(振仮名は省略)。

それ天下の四民士農工商とわかれ、各其職分をつとめ、子孫業を継で其家をと、のふ。就中町人は商売それくゝにわかるといへども、先は金銀の利足にかゝるより外なし。然るに田舎の町人はそれくゝの国主・地頭に憚り、其上目にさのみ美麗を見ざる故に、心におのづからうつる事なし。爰を以ておほく代を累て業をつとむ。京・江戸・大坂の町人は、其元祖、或は田舎又は人手代より次第に経上り、商売をひろげ、富を子孫に伝へんと、其身一代身をつめ、家職の外に心をおかず、かんなんしんくを積で、其子家を継、其ものは親のつましきことを見覚へ、又は其家のさまで富ざるうちに生立習ふ故に、漸其一代は守り勤といへども、又其孫の代に至りては、はや家の富貴より育立、物ごとのかんなん、金銀を大切と云事をしらず。故に自然と世風を見習ひ、心たかぶり、家職を人まかせに仕置で、うかくと月日を暮し、身軀に物入多成行まゝに、其身も漸年老、物心附といへども、家業のみちをしらず、物入の多なるにまかせ、手廻しに人の金銀を請込、次第に利まどひに成、果は家をつぶす者、世のならはしと成。凡京師の名ある町人、二代三代にて家をつぶし、あとかたなく成行事、眼前に知る所也。(下略)

田舎から出て来た者や奉公人が苦勞して一家を構えても、二代三代目に至り、初代の艱難辛苦を知らずに家職を忘れて怠惰な生活をし、ついに没落していく例が眼前にあると説き、さらに序の末尾に、「百姓・職人等は数代家を伝ふる事、一日も怠るときは、忽食をうしなふ故に、尤よくつとむ。只商家耳後は手代まかせ、其身は代の続くにし

たがひ、家業をわするゝを以て、終に家をうしなふ。前車の覆るを見て、後車のいましめのため、見および聞伝ふる京都の町人、盛衰をあらまし愛にしるす耳」と結び、次いで四六家の家毎の盛衰を詳しく記す。その概要をまとめてみると、後掲付表のような内容である。業種は長崎商人、長崎問屋、両替商、町貸、質屋、麻苧問屋、衣金入商、藏元、上澄商、小間物商、薬種商、呉服商、糸商、関東問屋、巻物商などであり、一度は富豪商人になったが、大名貸、町人貸、遊樂、奢侈、不行跡、借金、道路開削、新田開発、鉾山掘削、商業不得手、安売商法損銀、手代まかせの家業などからついに没落している様子がうかがえる。いずれも金銭に首を締められて没落していく商家の悲哀史で、とくに二代目や三代目に倒産している例が目につく。三井高房はこうした没落商家実録を書き遺すことによって、後世の子孫の戒めとしたのである。個家のみならず、同族が共倒れしている例（那波屋、丸屋（花房一党）、片木）もあり、商家の不安定な状況が如実に示されている。とくに大名貸による貸し倒れが圧倒的に多く、三井家でも大名貸をすることが厳禁となっていた。

二 矢代家家訓の作成経緯と始祖の人生史

『町人考見録』が作成されて三〇年後の宝暦八年（一七五八）三月に、現在中京区室町通二条下ルで繊維製品卸売業を営む矢代仁兵衛家の先祖が「定メ」⁽³⁾を作成した。矢代家の始祖は庄兵衛宗円といい、その子で二代目好玄が父の存生中に父より聞いた事柄をまとめて一卷としたものがこの「定メ」である。全三六カ条から成る「定メ」の末尾

には

右ハ宗円聖靈存生之節、常ニ被仰聞候事故、當時存セザル者モ可有之候間、承知致シ候義アラ／＼思ヒ出シ、前後文盲愚筆ヲ顧ミズ、唯童蒙之耳ニモ通スル為メ、此度相改メ一卷ト致ス者也

とあることから、この「定メ」の作成経緯が明らかである。作成された後、同族間に「定メ」が徹底するために年二度、すなわち正月三日と盆の七月一七日に本家に集まり、一統立会の上読み聞かせることと規定している。しかし「一統ノ事故多人数」であり、理解しにくいことも尋ねることが出きかねるので、前もって個々の家で正月二日と七月一五日の夜に読み聞かせ、その場で理解させておくようにと記している。このようにして「定メ」の精神の共通認識を深めることが推進された。

ところで「定メ」の最末尾には、始祖庄兵衛の人生史が記されている。奉公に出た庄兵衛がノレンワケによつて別家となり、本家が衰退したので自家を始祖家としてやがて同族を構成するようになった顚末が語られており、まさに始祖崇拜昂揚のための「定メ」の典型例となっている。

吾家ノ先祖源氏之裔矢代宗円ハ丹州龜山柳町矢代四平ノ御子也。

年十二ニシテ父ノ仰ヲ蒙リ京都へ奉公ニ出テ給ヒ、槌屋九兵衛殿店へ御越被成候処、其節支配アリテ足袋店へ遣ハサル可ク申付ラレ候故、元祖御心ニ如何ハ敷思シ召御暇ヲ請ヒ、夫レヨリ誉田屋市兵衛殿御方へ奉公ニ御越シ成サレ候

誉田屋市兵衛方が奉公先と決まり、翌年からは「日々木綿切レ袖口等ノ類」を売り広め、一五歳の年からは「商先キヲ引請ケ次第第二御出

精」という状況になった。すなわち奉公して三年目に早くも得意先廻りを任されたという。ところが主人の市兵衛は身持ちが悪く、身代不如意になり、庄兵衛は奉公人の身分ながら主人に諫言をしたところ、主人市兵衛は立腹して銀子五百匁をやるから奉公をやめるように申し付けた。このことを市兵衛の父の「御隠居」が聞いて押し留めようとしたが、市兵衛は聞入れなかった。そこで「御隠居」の独断で庄兵衛をノレンワケさせることにした。

御隠居ヨリ仰セラレ候ハ、大功アル庄兵衛事故、暖簾ヲ遣ハスベクトテ是レヲ給ハリ候、夫レヨリ裏店ヲ借り御商ヒ成サレ候。晝迄二当地ヲ廻リ晝ヨリハ大津或ハ伏見迄モ自身箱ヲ持チ御越シ、御家業專一ト御務メ被成、夜分ニハ津キ臼ニテ米ヲ自身御ツキ御辛勞遊バサレ候故、段々御出世被成候テ、則チ室町ノ居宅買得、其外所々抱屋敷ヲ御求メ被成候

奉公人別家を許された庄兵衛は裏店を借りて商売を始め、家業專一に務め、ついに商人の理想の場所である室町に「居宅」を構え、また所々に「抱屋敷」すなわち別宅をもつようになった。一方本家市兵衛は家業も務めず、相場に手を出し、次第に衰微し、やがて死去した。別家庄兵衛はこの時に市兵衛の娘子五人の世話をして結婚させ、子息市兵衛を家の跡継ぎにした。しかし子息市兵衛は「身持不埒」であるので、自宅に引取って世話をしたものの中々立直らないので、ついに「二家中義絶」となった。本家との絶縁という非常事態となったのである。商家同族の分解である。換言すれば本家の不始末からくる別家の離反独立である。ここに庄兵衛を始祖とする矢代商家の成立がなされ、やがて矢代同族が形成されることになる。義絶後庄兵衛はやはり

本家に思いを寄せた。

本家ノ相立タザル事ヲ御歎キ成サレ、右市兵衛殿儀本心ニ立チ返ラレ候ハ、御形見トシテ銀子拾貫是レヲ遣ス可ク由仰セ置カレ候テ、御年五十九ノ二月廿三日御死去成サレ候、且又故国丹州方ヘモ御記念トシテ銀子五貫目是ヲ遣ハサレ候、最モ御祖父御存命ノ節ハ孝道残ル処ナク家屋敷迄御建直シ遣ハサレ候モノ也、尚元祖平常御咄シ被成候趣ヲ以テ定書ト致シ、二季ニ談聞カセ申ス可キ者也

本家の再興のために、郷里の父親（二代目から見ると祖父）の親孝行のために、庄兵衛のとった態度が明示されている。ここでも年二度「定メ」を読み聞かせよと記している。

以上のように始祖（元祖）庄兵衛宗円の艱難辛苦の人生史を語り、その御恩を忘却しないことを同族員に教示したのであった。同族の結束が、商家の没落事例が多い当時の世情には最も肝要なことであり、同族所属員は始祖の教えを守ることによって愈々協栄を目ざそうとした。

矢代四平（亀山矢代家）——矢代庄兵衛宗円（京都矢代家元祖）——矢代好玄（京都矢代家二代目）という系譜の中で、二代目好玄は元祖宗円の立身出世の過程を明記している。それは「孝悌忠信」という儒教倫理思想に関連させて説かれた。すなわち「孝悌忠信ハ人道之本也。孝トハ父母ニ仕フル也。悌トハ兄タル人ヲ敬フ也。忠ト曰フハ主人ニ仕フマツル也。信ハ誠也」とし、「信ヲ以テ孝ト忠トヲ勤メル人ハ道ニ相叶フ、依テ其ノ身モ能ク修リ家業ヲ第一ト心ニ掛ルニ依テ、自然ト立身ヲ致サル事ハ聖賢ノ言葉ニモ述ヘ給ヒテ、正シキ人ノ道也」と

し、誠の心で親孝行や主人に仕えることは人道に叶い、そのことで身が修まり、家業を第一にする心も生まれ、自然と立身出世するのだという。主人市兵衛家に対する忠、親四平に対する孝をはかり、誠実に家業を続けた元祖は必然的に立身し、家を興したという結論になるのである。このような町人道ともいえる思想は、京都町人に人気のあった石門心学の教えの影響の中で形成されたものではなからうか。

三 矢代家家訓の内容

前節で矢代家家訓である「定メ」の作成経緯と元祖宗円の創家の過程をみてきた。本節では具体的に全三六カ条にわたる「定メ」の内容の分析とその特徴をみていこう。

第一条には遵法、親孝行、主人に忠孝、下の者に憐れみを施すことの大切さを説く。第二条は本家主人が「身持不行跡」や「家法不正之事」があつたならば、「惣様同心」で異見を申し、承引しなければ、「一門中」から何度も異見をし、聞かなければ「親類中」で相談し、主人の態度が悪ければ「押込^{おしこめ}」、すなわち強制的に隠居させる。このことを見のがすことはかえって不忠であり、本家の相続が行われることが何よりも大切であると述べる。

第三、四、五条は奉公人仲間（朋輩）の和合の大切さを説く。一、二条が主従間のあり方であるのに対して、三、四、五条は仲間のあり方を説く。番頭から小者に至る迄の朋輩は睦まじく、真実で交わること、もし争うようなことがあれば家騒動となり、それは主人に弓を引く不忠行為であるから朋輩和合こそ肝要だとする（第三条）。朋輩中

不埒がましき者がいれば意見を加えて戒め、もし不埒をした者がいれば用捨なく届出ること（第四条）。番頭並の者は特に心を慎み、行儀を正し、主人に成り替って内外に心を付け、家のためになるべき事を專一にし、小者に至る迄指導すること（第五条）。

第六―十一条は商売のあり方についての規範である。各自商売に精を出し、仕入れ方については残りの商品の多少、時々模様風合、糸物の値段の高下などを考慮して買い入れること（第六条）。西陣織の買物に関する注意事項（第七条）、売れにくい商品でも商品価値の高い物は時には買うこと（第八条）。商品は毎年土用干しをすること（第九条）。常得意衆はいうまでもなく、切一寸を買う者でも旦那であるから、商品は買手のためになるように心懸け、また詛物は機屋を見立てて頼み、客の注文通りに出来上るように日々気をつけること（第一〇条）。新得意はよくよく吟味し、身元が確かな者と判断した場合に商売をすること、そうでなければ延引きするべきこと（第一条）。

第十二―十三条は日常の生活規範である。博奕勝負事諸相場事は厳禁で、自分勝手な商売もしてはいけない（第二条）。家内の男女は猥りがましき行為はせず、行儀に心がけること（第三条）。華麗を戒め、儉約に勤めること（第四条）。家内の病人は心を尽くして看病すること（第五条）。店則は今迄通り年二回怠りなく読み聞かせること（第六条）。触書や町の伝達その他何事によらず失念することなく知らせること（第七条）。奉公人として子供（丁稚）を置く場合は、一カ月の間によく注意をして見分し、見込みのない者は評議の上親元に戻すべきこと（第八条）。子供（丁稚）が暇な時には手習や算盤の稽古をさせること（第九条）。店の者が諸見物に出かけ

る時には、主人の指図を受けて出かけること（第二〇条）。衣類や身の廻り品を自分勝手に拵えてはいけない（第二一条）。年季奉公を終えた朋輩の「落着」の儀は互いに親愛をもつてすること（第二二条）。家法は定めぬ通り守ること（第二三条）。

続いて第二四、二五条は「商内」^{あきない}に関する内容である。商内は主人や朋輩中と相談してすること、指図のない自分勝手な商内は一切してはいけない。もし自分勝手にして損金を生じた場合には当人の自己負担とする（第二四条）。年来の得意先の支払いが少しでも滞った場合には、相談の上その人物とは「取続商内」、すなわち直接取引ではなく、第三者を中に入れた商売をすること（第二五条）。店に並べて見せる商品は並べる時に、得意先に見せに行つた商品は店に帰つた時にいずれも早く「見せ帳」に記入しておくこと（第二六条）。買手より多少によらず商品を受取つたことを示す判書判を取り、帳面と引き合わすこと（第二七条）。買手より代金を受取る時には、買手と商談相手となつた者以外の余人に金子を請取らせるように心得ること、商談相手となつた当人は委細を算用帳に記すこと（第二八条）。西陣より買入れた商品で絹に疵があつたり尺違いがあつて交換に行く時には、買つた当人とは異なる人物を遣した場合でも、三日の内に当人が商品を吟味して通い帳を消すこと（第二九条）。朝より商内に出た者は正午に、西陣に買物に出た者は日暮に帰るべきこと、その際行先を言つて出ること、やむをえない事情で遅くなつた場合は帰つてきた時に早速理由をいうこと（第三〇条）。売買先以外の所に立入るな、また得意先での付き合いはするな（第三一条）。

さいごは火の用心や戸締まりについての条である。すなわち出火の

時には他所に行つてゐる者は早く帰ること（第三一条）。毎夜店や土蔵の戸締まりは念入りにすること（第三三条）。土蔵や戸前締役は他行せず、たとえ用事があるともその役の一人は必ず在宿しておくこと（第三四条）。火事の時にはうろたえず、平生の心得であること、特に番頭は夜分の火事の際には心をつけて小者に至る迄一人も残らず呼び起こし、逃げる方角を教えて逃がせ、帳箱證文を持出すこと（第三五条）。

以上三五ヶ条が「定メ」の概要である。そして最後の第三六条には全体の総括が記されている。

一人タル者仁心ハ元ト天ヨリ受ケ得テ己ニ備ハリタル物ナリ、然レトモ我勝手ニ迷ヒ暗ク成リ行キ候、暗キ時ハ畜生ニモ劣レリ、何卒人ハ人ノ道ヲ正シク勤メ渡世致シ度候、最モ主人ハ小者ニ至ル迄モ我子ノ如ク思ヒ、願フ処ハ人々相続致サセ申サテハ主人之役目、相勤マリ申サズ候、又家内ノ人ハ其身ハ勿論親ノ心、何ヲ願ヒ奉公ニ出シ候哉、首尾能ク相勤メ相応ノ商売ニモ本ツキ未繁昌ヲ祈ル事ナリ、然ルニ人欲ニ引カレ不奉公ヲ致シ親請人ニ難義ヲ掛ケ候事不孝トヤ曰ハン不忠トヤ曰ハン、是レ第一ニ慎ムベキ事也、此願成就セン事如何スベキナレバ、先己ガ身ヲ治メ朋輩睦間敷勤ム可キ事ヲ怠ラズ、家業ヲ精出シ互ニ心ヲ付ケ下朋輩ヲ引上ケ仕入追々相続ケ者ヲ取立、主人ノ家ヲ厚クシ各立身ヲ致シ候ヘバ、主人ハ親ノ如ク家内ハ子ノ如ク成ル可シ、実ニ斯ノ如クナレバ忠孝ヲ全クシ自ラ天理之冥理ニモ相叶ヒ申ス可キ者也、仍テ此ノ定書ヲ相認メ互ニ相続ヲ希フ処如件

このように主人と奉公人は親子のような関係であり、主人（職親）

に対する忠、実親に対する孝を積み、朋輩共に仲良くして家業に精を出していけば、立身すると説いている。

以上のように、(1)遵法、(2)親孝行、主人に対する忠孝、下の者への憐み、(3)主人に対する諫言、(4)奉公人仲間の和合、(5)商売の心得、(6)日常生活規範、(7)火の用心、戸締まりを詳細に制定し、個家や同族団の一致団結を呼びかけた。始祖の教戒が「家」に徹底し、「家」の崩壊を防がれる。ここに始祖崇拜が特に重視される理由があった。「家」の創始者の血縁者や擬制的血縁者が、始祖を度々再認識することによって、始祖との系譜関係が強く意識され、それがひいては「家」の超世代的継承という理想的理念を生んだ。

家訓形成過程には始祖の業績を殊更詳記し、始祖に対する崇敬を喚起する理念がよくみられる。日本における先祖崇拜も、時代こそ異なるが、このように始祖崇拜から始まったと推定される。始祖崇拜は同族(氏族)の統一をはかる上でも不可欠であった。近世の家訓には二代目、三代目が始祖の遺言をまとめるという形式をとる例が多い。これは家訓の聖化、権威化を意味する。二、三代目に家が崩壊する事例は先の『町人考見録』でみるように、しばしばあったが、家が繁栄していくためにも、二、三代目の世代に家の態勢の建て直しをする必要から、堅実な当主や手代がいる家では家訓作成が行われた。また家訓の中には同族や奉公人仲間の和合が示されており、奉公人から主人へ諫言することも説かれている点、タテ的な系譜や序列は厳存しながらも、ヨコの柔軟なる団結も存在していた。そして近世の貨幣経済の隆盛の中で、都市商業のめまぐるしい競争を勝ち得ていくために、このような家訓が必然的に作成されたのである。家訓は「家」の精神的、

経済的大黒柱となって機能したといえよう。

今後、京都の商家の家訓と都市民俗の展開を検討する予定だが、さらに家訓と石門心学との相関性を比較検討する必要がある。寛政七年(一七九五)自跋の『譚海』(巻の九)には、京都における石門心学と町人との交流が次のように記されている。

○享保の比京都に石田勘平(梅)と云儒者有、朱学にて専ら一流の教をなせり。此勘平丹波の産にて、本心を得るといふ工夫をなし、その趣を愚俗の人にあまねくつたへけるに、門人あまた出来て、歿したる時洛東鳥辺野に葬たり。門人の中に手島嘉左衛門(梅)といふ者京都の産にて、引つぎて本心の講釈をなし、俗言をもちてあまねく勤ける故、其説大におこなはれ、嘉左衛門をしへにて、本心といふ事を得たるもの数百人に及たり。此本心のむねを得る時に至りて、断書といふものを其人にあたへ、今日よりはすなはち石田先生の旨を得られし事なれば、嘉左衛門が弟子にはあらず、石田先生の弟子ぞとて、其人に教て鳥辺野におもむかしめ、墓を拝さする事に成たり。嘉左衛門歿して其子嘉左衛門と称し、父の道をひろめしかば、いよ／＼教盛に成て、京都をはじめ諸国にも此をしへを伝る人数多出来しなり。嘉左衛門門人に中津道二(沢)といふ者大坂の産成しが、諸国にあそびて此道をひろめ、当時天明の比江戸に在住し、盛に本心の旨を説とせしかば、諸侯をはじめ諸所の招待にあづかり、大賈の番頭などおほく帰依して、男女此をしへを信ずるもの万人にあまなりとぞ。其をしふる所の大意、程朱の本然の氣質にもとづき、至極の所は釈老の旨とひとしく、我心の安立する所を得るを肝要とくみたてたる事にて、禪家悟入の

理に粗かはる事なし、儒の道をやはらげて、平話にて人のよく聞
取やうに物語にし、又は仮名にて平話に、其をしへを書あらはし
たる書もあまたあり。只俗人を教ふる事を先として、おのれをた
てず、たとへば其むねを著たる書を披露するとても、何とぞ是を
よんで御かんがへ下されよなどと、無心いふやうにたのみて人に
すすめ、講談をするとても座料などと云事一錢もとらず、其座敷
男女の席をわけて、しるしらず、人をまねき、其弟子の世話する
者は、袴を着て入来る人の草履はき物まで、丁寧にあづかり取扱
て、さりとは御気のどく成事、よう御こしありしなどと、此方
より説をうるやうにもふけかまへたれば、人々よろこび帰依して
至る所市をなし、感服せずといふ事なし。此道に無文の男なれど
もよく心理の義を会して、人にをしふる故、たび／＼講談の席に
のぞむもの、或は不孝をあらため、又は放蕩成身を悔て節をあら
ため、正しき道におもむくものあまたありしかば、たふとき事に
信じいたゞく事がざりなし。俗人をすゝめみちびくには、又巨益

少からずといふべし。
平易に人の道を説く心学が町人に受け入れられた。儒教、仏教、神
道、民俗を習合させたこの学問は、町人の心を安定させ、また没落す
る不安にいつもあつた商家の道德規範ともなり、それは家訓作成時に
も家訓の中に織り込まれることになったらしい。今後検討することに
して一まず本稿を終える。

注

- (1) 赤田光男「京都の地縁制と同族制―都市民俗研究に寄せて―」『日本文
化史研究』第二九号 平成一〇年 日本文化史学会
- (2) 三井高房『町人考見録』中村幸彦校注『近世町人思想』（日本思想大系
59）所収 昭和五〇年 岩波書店
- (3) 京都府編『老舗と家訓』所収 昭和四五年 京都府
- (4) 津村淳庵『譚海』竹内利美ほか編『日本庶民生活史料集成』第八巻所
収 昭和四四年 三一書房

付表 京都富豪町人の盛衰（『町人考見録』により作成）

富豪町人名	同家の由来	繁栄時の状況	居宅	業種	没落要因	没落状況	没落後の実態
石河 自安	先祖は尾州犬山城 主、関ヶ原の陣の頃 金銀財宝を持ち入京 し浪人となる	惣領家自安栄耀、茶 道具多く所持、石河 の門葉多し			大名貸	七八十年前身上潰	その日暮しも困難、 門葉全て跡形無
袋屋 常皓 弟与左衛門	先祖は室町三条辺の 長崎商人の手代、三 井淨貞、那波屋と縁家	京都で一二の富家、 四方に四面の蔵		長崎商人	大名貸	六十年前家屋敷分散	跡僅に残、弟はその 日暮し

高屋 清六	先祖は旗本、佐渡の公役を勤む、名字田中、浪人し金銀を多く持ち入京	大屋敷を構える、清水寺奥の御堂建立	両替町行あたり（南端）		大名貸	四五十年前身上潰	
二村 寿安	越後家家臣、一伯卿の時浪人となり入京、高屋と縁者	大分の金銀所持	下立売室町		大名貸	石河自安と同時身上潰	其身一代にて果つ
平野 祐見	代官平野藤治の一家	富栄	西洞院六角下ル池須町 ↓両替町へ移住		大名貸	五十年前身上潰	
糸屋十右衛門	越前敦賀の津の米商、大坂への回送米で富裕、後京住	一二代の十右衛門名物の茶道具多く所持、西鳴滝に禅院（妙光寺）建立	烏丸三条下ル町↓上京聚楽へ引籠る		大名貸、奢侈	七八十年前身上潰	三代目行衛なく身上果つ
両替 善六	軽き両替商から段々と富貴になる	七八十年前京一番の両替有徳者、二三十万両の分限者、一町四方の屋敷、茶湯能楽などの遊楽を極める	下立売烏丸西へ入ル町	両替商	大名貸、遊楽	二代目善六代に身上潰	元禄の中程に家沽却、跡無
両替善四郎		五十年前長州毛利家へ一万三千貫目を貸す	室町通大門町		大名貸、町人よりの借銀	三代目に潰	
阿形 宗珍	先祖は奥州延沢の金山にて身上よく成、江戸仙台屋敷へ金銀の御用達、七十年前江戸大火後京へ引越	阿形一家多し			大名貸、町人よりの借銀	三代目宗珍代三十四年前身上潰、阿形一家全て身上潰	宗珍倅甚兵衛は仙台藩家中となる、京都に阿形一家一軒も無
小牧惣左衛門	勢州小牧村出身、元祖惣左衛門は法鉢して順古と称し、寺の講中頭取となる	江戸に紙店、駿河町に両替店あり、諸大名の仕送り金銀の御用達	三条武藤町	両替商	大名貸、町人よりの借銀	四十四五年前二代目代に身上潰	

平野屋清左衛門	袋屋と一家	六七十年前は二千貫目余の身上、二代目母の代に不断灯明をとほす灯明蔵あり	衣棚二条下ル町↓下町に移住	町人相手の町貸、質屋	二代目病身者、三代目愚か者で長崎の薬材の買いだめ、土佐の材木商売に失敗	四十年前三代目代に身上潰	跡形無
図子口			室町通御池上ル丁西がわ	長崎問屋	八十年程前町人よりの借銀千四百貫目	多額の借銀のため板倉周防守より磔に処せらる	
大黒屋徳左衛門			新町二条下ル丁東がわ上よりの角	長崎問屋	六十年程前方々よりの借銀千二百貫目	板倉内膳正より獄門に処せらる	
三宅五郎兵衛	元々立花家へ久敷出入の町人、関ヶ原の陣の時、大坂方の立花氏敗れて三宅方へ隠る、立花家の重宝千とせの硯箱を給わる	大名貸にて中位の身上、三宅一家上・中京に数家あり、五郎兵衛子宗也は家原自元と従弟	中立売		大名貸	五郎兵衛子宗也身上潰 三宅一家いづれも大名貸で潰	宗也娘は尼となり北野真盛寺へ入寺、宗也と悻は柳川に滞留し立花氏の庇護を受ける
新屋伊兵衛		中位の身上	三条通（親伊兵衛の代）		子の伊兵衛能芸にふける	三十年前身上潰	阿波蜂須賀家へ能太夫として就職
米沢屋久左衛門	先祖は京都白川口の髪結、代々米沢城主上杉家に入上、上方用事担当	上杉家の御用達、米沢にも店を出し、手代も多、三四代家相続し繁昌、東洞院四条下ル丁にも大家を持つ	三条通柳馬場西へ入ル丁	麻苧問屋	三四代目久左衛門米沢よりの米穀の津出しの道路開削に所持の金銀を使い果す	三十年程前身上潰	家財等失ない、今は跡形無
那波屋九郎左衛門	先祖は播州那波出身	親常有時分七八十年前は京一番の有徳者、親没後惣領九郎左衛門素順家と第十右衛門正斎家の二家に別れる、素順は五六千貫目、正斎は二	素順：小川二条上ル町（加賀前田家屋敷を購入） 正斎：小川三条上ル丁（仙台伊達家屋敷を購入）		素順惣領（二代目九郎左衛門）早世、その弟相統（三代目九郎左衛門）するが早世、末弟が四代目相統するが四十才程で死去、三井家三代目	借銀を訴えられ、京都奉行所より閉門に処せらる、正斎家は大名貸で三十年前に身上潰	江戸、大坂店は名前替り、其のまま有

三井三郎左衛門	和久屋九郎右衛門	久住権兵衛	八文字屋宗貞	金屋勝右衛門	辻次郎右衛門	両替善五郎	
元祖紹貞は宗寿（高利）の兄、二代目三	那波屋、井筒屋と縁者	先祖は勢州神戸出身		先祖は室町通で九十年前長崎問屋、唐人宿を兼ねる		名字は井川	
紹貞二十間口の屋敷地を銀百貫で購入、	西洞院池須町に広島藩浅野侯を招請のため普請した屋敷有	那波屋、和久屋などと同様中京有徳者の一	身上よし	唐人より預かった銀子が徳分となり身上よく成る	両替善五郎以後の大両替屋、二三十間口の大屋敷	五十年前は京・大坂一番の大両替屋、大名貸の間屋、長者殿	三千貫目の身上、両人とも身分以上の振舞
室町御池町	室町通二条上ル町	西洞院二条上ル町（那波屋の隣）	三条通東洞院西へ入ル丁 兄浄巴は四条通	二条通室町西へ入ル丁	室町通出水上ル丁	室町通下立売上ル町	
	長崎商人	長崎商人		長崎問屋	両替商	両替商	
二代目は四千貫目の大名貸、三代目不器	大名貸、後の九郎右衛門不行跡者	大名貸	宗貞倅彦三郎代大名貸多、その子藤五郎代借銀催促を受け裁判沙汰、兄浄巴は大名貸で三十七八年前身上潰	二三十年前三代目祐竹代に長崎問屋の営業権を渡した手代に銀子千貫目余踏み倒される、新田開発失敗	大名貸	大名貸	三郎左衛門の子を五代目とす、五代目大名貸に身上差支え、芸州藩よりの拝借銀、久留米藩よりの拝借米
三代目の時衰家、借銀を年賦返済にする	後の九郎右衛門代身上潰	十年前跡形無	藤五郎代に少々の破産で事済	今の庄（勝）右衛門代に家潰	二十年前潰	三十年前不手廻し	
		久住一家皆々逼塞		居宅半分売逼塞		家は質物に入、財宝は売却し日々の生活に困窮を極む	

三井六右衛門	元祖紹貞は弟助三郎の子を養子にし、二代目浄貞の弟にする、後法躰して道恵と名のる	親常貞、兄七郎兵衛、弟彦右衛門	浦井七郎兵衛 同 彦右衛門	ちぎりや惣 左衛門	三木権大夫	玉屋忠兵衛	上澄屋次兵衛
郎左衛門浄貞、三代目三郎左衛門は將軍家御納戸の御用をつとむ	衣棚に常設の能舞台建つ、五六千貫目の分限者、二代目浄貞は茶道具、庭造りに数寄をこらす、遊芸に能達	紹貞は道恵に江戸店二カ所、千貫目余を譲る、道恵は鳴滝山莊を構え榮耀、鳴滝の竜宮と呼ばれる、黄檗の禪法を聞く	親常貞代は二三千貫目の身上	五十年前は京の三条通より江戸迄の路次一番の身上と沙汰あり、四五十年前親の代、三千貫目余の分限者	二三千貫目の身上	親好叔は殊外商人心を有する者	元、蒔絵の粉の上澄商売にて、先祖は輕き者
御池町（三郎左衛門方南）			烏丸通三条下ル町	衣金入商、のち銀廻し（金融業）	長州紙の藏元（当代の三代目権大夫）	四五十年前迄上京一番の大名貸	四五十十年前迄善五郎、辻らと大名貸、四五千貫目の身上
					下立売通室町東へ入ル町	室町通中立売下ル丁	室町通仏光寺下ル丁
						上澄商売	
量者で営業不振、三代目惣領は那波屋名跡継ぎに出る、次子相続するも早世、大坂鴻池家より養子をもらい五代目とする	六右衛門（道恵）は不行跡者、奢侈	兄弟奢侈、不行跡、大名貸	大名貸	藏元仲間の引負に連動して借銀身上半潰大名御用金	二代目好意不行跡者、遊郭狂い、大名貸	大名貸	
	三十七八年前江戸店二軒潰、借銀千貫目余、一二歩の分産	身上支障	二十年前、今の与三右衛門身上半潰	大方身上無		諸道具売却、居宅は質物に入れ、潰	三十四五年前二代目身上潰
家屋敷沽却し江戸へ下りロウソク屋となる、娘一人は奉公へ出す、悴六右衛門の江戸居所不明	兄は酒井雅楽頭、弟は奥平家の家臣と成り京を離れる	幽かに相続	道具迄売却し逼塞				今三代目元の上澄商売

百足屋久左衛門	丸屋事 花房 一党	田辺屋平三郎	藤屋市兵衛	津久井太郎 右衛門	播磨屋長右衛門	薩摩屋新兵衛	家原 自元	大黒屋九左衛門	片木勘兵衛
	名字花房、屋号丸屋旗本に同姓の一家あり	元、五六十年前迄江戸通の道具屋	元祖市兵衛は同町藤屋清兵衛の手代、別家して長崎へ通い商売	元祖太郎右衛門は勢州白子出身		親道甫	親自仙	祖父浄円は勢州伊沢の住人、江戸に呉服店、一名富山という	
千四百五百貫目の分限	花房一家同町に五六軒あり、いずれも大名貸	二十四五年前迄、三四十貫目の大名貸、四条通一番の身上	一生に二千貫目の分限	二千貫目程の身上	京一番の薬屋	親の代は一二千貫目の身代		七八百貫目の身上	糸商売一番の商人、西陣の長者殿、同じノレン印をかける類葉百余軒のきを並ぶ
室町御池町西がわ(親の代)↓西洞院御池通西へ入ル丁へ移住(四十四五年前)	室町通蛸薬師町	四条通	室町通御池町	東洞院三条下ル丁	二条通新町西へ入ル丁		西洞院竹屋町上ル丁		大宮糸屋町樋の口
			長崎商人	小間物商	薬種商			呉服商	糸商
町人貸、大名貸、両替での高利を望み失敗	大名貸	大名貸	三代目市兵衛不行跡奢者、大名貸	三代目に身代二つに分く、家業怠惰	二代目長右衛門栄耀者、歌鞠を好む、和州金峯山の金山開発を山師にだまさる	二代目新兵衛(素朴)不行跡、女色にふける、法躰となり茶道の宗匠、盲目、大名貸	大名貸	三代目九左衛門呉服の安売商法で損銀、借銀	二十年前より両替店を出し大名貸、銅山掘削に失敗
三十四五年前潰	三十四五年前潰	二十年前二代目平三郎代潰	十四五年前三代目市兵衛代潰	江戸店、上州質店共に潰	十七八年前身代潰	所持の道具質物流、身上潰	自元居宅を明	居所もなくなり、出家	身上潰
跡無、弟仁左衛門跡、室町通御池町で両替屋を営む	今一軒も無	逼塞				弟宇兵衛名跡相続、不行跡者、漸に暮す	逼塞	大坂の一家大和屋が大黒屋の店を取立、江戸で呉服商	

家城太郎次郎	勢州伊沢出身	江戸店は名代の本店	江戸店：本町二丁目 京仕入店：御池町 両替店：新町姉小路 上ル丁 大坂両替見世：今橋 筋	呉服商	名代程身上なし、借 銀重なる	僅に営業、京店は新 町の両替店一カ所に 縮少	
中川清三郎	勢州松坂出身、親常 故、伯父常印	江戸に町屋數十カ所 計あり、幕府の御為 替御用を勤む、親、 伯父は懃成身上	京両替店：新町三条 下ル丁 江戸両替店：本町替 町 江戸米店：伊勢町 大坂両替見世：会所 町		親伯父二十年前死 去、惣領清三郎、弟 孫三郎家相統する、 のち共に出家、妻娘 も尼、家業は手代ま かせ、京にて三四百 貫目の借銀	身代潰、常有（清三 郎）夫婦四年前に死 去、常立（孫三郎） 再び身代の世話	常有の子、今の清三 郎大坂米会所の売米 口銭取を勤む
日野屋長左 衛門	親の代より関東問屋	関東の物産の問屋で は一二番の商高	間の町二条下ル丁	関東問屋	長左衛門小器量者、 手代を疑い、十七才 より自分で勘定、古 道具や茶湯に凝り、 身上差支	家、問屋株を人手に 渡す	幼年の子を引つれ逼 塞
柴田 宮内	養父はト玄という浪 人、水野玄蕃の子左 仲（宮内）を婿養子 とする		堺町通二条下ル丁		養父ト玄は儉約家、 宮内は「死に一倍」 の借銀をする、借銀 利子増える	ト玄所持の金銀も多 くは貸主北脇市兵衛 に取らる	宮内離縁し立退
菱屋十右衛門		三四十年前親代は二 千貫目の身代	御池町	巻物商	今の十右衛門店の外 に居宅をもち不行跡 者	身上潰	家財沽却
吉野屋惣左 衛門	親は嘉右衛門宗吾、 宗吾妻の兄弟が惣左 衛門、惣左衛門名跡 を継ぐ	惣左衛門は長崎会所 の両替、勝気者で分 限より以上に世上に 知らる	押小路通柳馬場東へ 入ル丁	両替商	大名貸、借銀	身上先相統	